

ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学訪問報告

訪問先：Katholieke Universiteit Leuven（ルーヴァン・カトリック大学）
Faculty of Arts（人文学部）Japanese Studies（日本学科）

訪問日程：2006年9月6日

訪問者：岡島千幸・鈴木陽一・伊坂青司

<スタッフ>

今回訪問したルーヴァン・カトリック大学は、1425年に設立された現存するカトリック系の大学では、世界最古の伝統を有している。ルーヴァン・カトリック大学・人文学部のなかの日本学科のスタッフは、主任教授のProf.Dr. Willy Vande WalleとProf.Dimitri Vanoverbekeのお二人であり、私たち3名の訪問を快く受け入れていただき、数時間に渡って日本学科の説明と学内主要施設の案内をしていただいた。

Prof.Dr. Willy Vande Walle氏は、明治初期の日本における西洋文化および法制度の歴史的な受容過程を研究対象にされているだけではなく、第二次大戦後のヨーロッパと日本の国際関係についても現代的な視点から研究対象にされている。とりわけ日本とベルギーの関係については、“Japan & Belgium Four Centuries of Exchange”を編集・出版されるなど、ベルギーにおける日本理解に貢献されている。また同氏は、日本資料学専門家欧州協会（European Association of Japanese Resource Specialists）の会長を務められており、ヨーロッパにおける日本研究の中心的存在でもある。

Prof.Dimitri Vanoverbeke氏は、第一次大戦後の日本における小作争議の調停を、法社会学の専門的な視点から研究対象にされているが、そればかりでなく、現代の日本文化全般についても幅広い関心を持って学生の指導に当たっておられる。

二教授の他に、研究助手が現在のところ4名在任しており、博士論文をすでに提出しているが、6年間の任期制をとっているとのことである。また研究員が80年代から増員されて現在3名在任しているが、4年間の任期制をとっているとのことである。

さらに語学講師（language instructor）として、日本人2名、ベルギー人2名が日本語の教育に当たっていることが付け加えられた。

<学生>

ベルギーの大学進学率は約17%であるが、ルーヴァン・カトリック大学の日本学科に所属する学生数は次のようになっている。2005年度については、1年生61名（希望者全員）を受け入れ、そのうち2年生に進級できたのは30名である。このところの学年末試験の合格率は、約40～50%にとどまっており、現在3年生は25人で、全体として計130名の学生が在籍しているとのことである。

日本研究を希望して入ってくる学生の志望動機については、80年代は日本のバブル経済に刺激されて日本経済に関心を持つものが多かったが、現代では日本のポップカルチャー（すなわち漫画や宮崎駿を始めとするアニメなど）の研究を志望動機にする学生が増えている点が特徴として挙げられた。もちろん日本文学や日本の歴史を論文テーマとして選ぶ学生も少なくないが、とくに最近では、日本社会に

おけるフリーター問題などを論文テーマとして選ぶ学生が出始めるなど、多様な関心から自由に論文テーマを選べるようにしているとのことである。80年代から現代への学生の関心の変化を見ると、日本経済から日本の精神文化へ、とくに日本文化のミステリアスな部分への関心が強くなりつつある点が、特徴として指摘された。

外国との交換留学生については、提携している大学からの受入数は5～6名、送り出すのは約20名程度となっており、受入数を絞っているとのことであった。受け入れる学生に対しては、英語での講義にも付いていけることが、条件として提示された。

<図書>

日本関係の図書については、中央図書館の東アジア文庫 (East-Asian Library) のなかに集められており、そこに中国関係 (約3万冊) と並んで、約1万冊が収蔵されているとのことである。ちなみに韓国関係の図書は約3千冊とのことである。日本関係の図書は、辞書や辞典などのレファレンスや古典文学大系、また主要な現代の文学全集などが、読書室で自由に閲覧できるようになっている。しかしそれ以外にも、屋根裏まで続く蔵書室に膨大な未整理の書籍が積み上げられており、そのなかには古い文献が豊富に収集されていて、ルーヴァン・カトリック大学の日本研究が秘めた可能性を見る思いであった。

(文責：伊坂青司)